

## 6月14日 例会卓話

### ジュネーブから見た日本の将来

国際情報通信アドバイザー  
国連機関ITU 前事務総局長  
トヨタIT開発センター 最高顧問  
早稲田大学客員教授

内海 善雄氏



私は国連の情報通信部門を担当して、8年間ジュネーブに住んでいました。その間の成果の一つがIP電話の普及です。電話料金の距離による区分をなくし、国際電話や国内長距離電話を市内電話とほぼ同じ料金でかけることのできるIP電話を、ア

メリカはじめ多くの反対を押し切って実現させたのです。そのほかにも若いころに日本政府代表部として3年間ジュネーブにいたことがあるので、トータルで11年になるのですが、本日はその経験から日本が国際社会からどのように見えるのかをお話しさせていただきます。

私が帰国して一番にしなければならない仕事は、区役所に行って転入届を出し、電話会社で携帯電話に加入することでした。日本は、住所が日本にない限り携帯電話に加入できないという世界でも珍しい国です。ところが、電話会社に住民票を持って行くと、免許証を見せろと言われます。免許証はもちろん古い住所ですし、パスポートの住所も違うということで、1時間ほどもめました。「区役所が今日証明してくれた住民票がいちばん正しい。免許証の顔も私でしょう。本籍地等は全部同じなのだから」と言ってもだめなのです。

郵便局で住居変更をしたときにも全く同じことを言われました。この1カ月間、こういうことばかりを経験しています。世の中が非常にマニュアル化してきて、ちょっと違うことをすると話が進まないのです。世界中でマニュアル化が進み、それほど訓練がなくても仕事ができるようになっていたので、日本が国際並みになったと考えればそれまでですが、その場その場でいろいろ考えて処理してきたという日本人の良さが少し薄れてきているように思います。

私がジュネーブにいた8年間は「衰退の10年」「失われた10年」等、不況の話ばかりが伝わってきました。しかし、帰国してみますと、東京駅の周りには大きなビルが建ち並び、私の関係する通信企業もみんな新しいビルになっていて、これが不況かという感じです。確かに地方へ行けば商店街のシャッターが下りていて、フリーターも増え、日本人たちは自虐的に「不況だ」「だめだ」と言いますが、外から見れば全然不況ではありません。

しかし、バイタリティがないのです。よく言えば非常に静かで落ち着いた感じ、悪く言えば自信喪失の状態です。世界の情報通信・電気通信を見てきた私は、帰国後、みんなから「日本の電気通信はどうしてこんなに後れているのか」と聞かれました。みんな、日本

は非常に後れていると感じているのです。その証拠に、先進国に負けないようにということで、2~3年前には内閣にIT推進本部ができました。私から見るといちばん進んでいるのに、なぜそんなことを言うのか不思議でたまりません。

高齢化も進んでいます。私が住んでいる横浜も、住み始めたときは若い人がたくさんいたように思うのですが、帰国してみると歩いているのは老人ばかりで、子供があまりいません。高齢化が目に見えて出てきているという印象を受けました。

さらに、世の中が非常に極端になっています。いろいろ連絡したいと思っても個人情報保護ということで名簿がありませんし、株主優待券の申込書にさき紙を張るようになっていました。また、横浜はごみを20ぐらいいに分類して出さなければなりません。実は、焼却場ではそれを全部一緒にして焼却しているのですが、うっかり分類を間違えようものなら、近所の人に「隠してこんなところへ入れている」と追及されたりして、本当におかしくなっているという気がしました。

それから、周りがどうなっているかということばかり気にかけて、みんな横並びになっています。各地で町村合併が問題になっていますが、財政難でもない、基金もたくさんあつてうまくいっている町まで、上からの指導で合併、合併と言っています。

そういう中で自虐的になっているところに、『国家の品格』がベストセラーになり、日本人は素晴らしいといってナショナリズムを高揚させています。読んでみると気持ちはよくなりましたが、書いてあることは国際社会では全然通用しません。でも、それが素晴らしいと言って、あげくの果ては役人バッシングばかりしている。成長さえすればいろいろな問題が解決できるのですが、その成長が鈍化して、住みにくい世の中になったと感じています。

私が住んでいたヨーロッパの国々は、数百年同じ言語を話していた地域はないぐらいい栄枯盛衰があり、戦って生き延びてきましたから、みんなしたたかです。例えば、スイスといえばハイジがいる美しい国、永世中立の理想的な国だと思われるかもしれませんが、私に言わせればとんでもありません。スイスはドイツ、南フランス、イタリアの辺境の地の人たちが税金を納めたくないと独立して作った国で、成り立ちからすると全く別の民族が契約してうまくやっついこうところとところです。貧しい地域ですから、傭兵に行つてスイス人同士が戦った例が幾らでもあります。そういうところが国際都市を一つのトレードマークにして生きているのです。金融にしても、名前を秘してマネーロンダリングができるような仕組みを作っているからスイスへ金が集まるわけで、非常に知恵を絞ってしたたかに生きています。

これはスイスに限らず、ヨーロッパの小国はみんなそうなのですが、彼らが日本人と大きく違うのは、まず自分たちのことは絶対に悪く言わないところです。日本人が重箱の隅をつついて悪いことばかりほじくり出しているのに対して、彼らは幾ら悪いことがあつても絶対言いませんし、新聞にも出ません。それから、マネーロンダリングの例でも分かるように、スイスが

中立でクリーンということは全くないのですが、そのようなイメージを売り出しているわけです。そういう国の人たちは、横並びということは全然考えません。人のことは気にせずに、自分がうまくやるという生き方をしています。

また、ジュネーブを州都とするジュネーブ州は人口が約40万人なのですが、ジュネーブ共和国ともいわれ、大統領や大臣がいます。40ほどある小さい村々にはそれぞれ学校があって、地域社会を単位としてコミュニティを守り、伝統を維持しています。現在の日本は全く逆のことをしているのではないのでしょうか。

それから、いいかげんの効率性というのでしょうか、完璧主義の日本とは違って、例えば日本では電気代や水道代の検針を毎月しますが、スイスでは予想で払っておいて1年に1回の検針で精算します。バスに乗るときも検札はなく、自分でかってに切符を買って乗るかわりに、見付かったら何十倍も払うというシステムです。また、スイスでは労働許可証がなかなか得られないのですが、それは建前で、実際には多くの外国人労働力が入っていて、散髪屋に行ってもスイス人は見たことがありません。

さらに、大きいことやナンバーワンはねらいません。メーカーも、日本のように自分のところですべての製品をそろえるのではなく、1つか2つ、ここでなければいけないというものを作っています。これはよく言われることですが、例えばロケットのエンジンフィルターを作っていて、スイスの企業がそれを出してくれないとロシアも日本もアメリカもロケットを飛ばすことができないということをして生きています。

日本人のように、謙虚でうそをつかない、突出しない、完璧主義でミスをしないうという生き方は、小さい運命共同体で暮らすときには非常に大事なことです。しかし、グローバル化の中でたくましく戦って生きていくときに、日本の美風は本当に通用するのでしょうか。ヨーロッパの人はそんなことは全く気にしていないように見えます。

日本には非常に勤勉で美的感覚や知性にあふれた人材がたくさんいます。これからはこの人材を世界的に活躍させて生きていかなければいけません。今のような見方をすれば、日本人は全然卑下することもなければ自虐的になることもないと感じますし、いろいろマイナスに言われていることも実はプラスになるように思います。

例えば、今の年金問題は、自分で自分の財産や契約を管理するのが世界中の常識であるにもかかわらず、記入ミスがあったなどと言っているわけですが、前向きに見れば、自己責任・自己管理という方向へ行くチャンスです。高齢化の問題にしても、ほかの国では60歳を超えるとよれよれになってもう働けませんが、日本人はお箸を使うことで脳を刺激しているからでしょうか、まだまだ元気に働ける、知識や経験の豊富な方がたくさんいらっしゃいます。このようにすべて前向きに考えて、日本もグローバル化の中でたくましく生きていければと思っています。

(前年度クラブ会報委員 竹本 松司 記)